空　平成23年4月30日発行　第9巻第2号　通巻第36号

空

2011・4・5

SORA 36号

道具箱

柴田佐知子

輪郭のまこと正しき桜鯛
牛車にて真夜は出てゆく雛かな
尽くるものに恋や命や百千鳥
春休み廊下が広くなりにけり
捨てられし子猫に草の揺れはじむ
—「俳句研究」春号より—
しろがねの帯締めてゆく初句会
鶏鳴のひつぱつてゐる霞かな
大波の大きな音も春めけり
囀にくるまれてゐる雑木山
ふらここのどこも動かず暮れにけり

PDF= 俳誌の salon

大いなる鱗飛ばしぬ桜鯛
囀の塊となり落ちてきし
天領や漆重ねし雛調度
初蝶の触れたる岩の震へけり
ことことと鳥が音立てリラの花
逃げ水の先を行くなり修行僧
棟梁の道具箱より花ふぶき
赤ん坊は誰かに抱かれ花筵
花の世の母に早き湯たてにけり
昼月の色となりゆく白子干
細き首揃へて鳥の帰りけり
朧夜の塗り薬もて母つつむ

PDF= 俳誌の salon

春の夢

高倉和子

大鍋を乾かすに火や寒明くる
煮凍の出来る厨のありし頃
黒々と門に入りゆく受験生
凍滝のゆるみて岩に沿ひにけり
母の言ふ昔は遠し梅の花
青空の端ばかり見て春眠し
山を焼く男ばかりの匂ひかな
春深し夜中の水の甘きこと
　長崎二十六聖人
殉教の幼き足や鳥雲に
百回も母を呼びたる春の夢

PDF= 俳誌の salon

鳥の恋

中田みなみ

温室ほのと明らむころの潮のいろ
温室の中はや来し春に噎びけり
トラックの鶏の鳴き立つ朝の東風
島巡るべんてん丸や鳥の恋
舟倉の隅に二枚の春畳
ベランダに烏賊干し島の復活祭
人波を愛して春の祭かな
胸に掌を当つる手話あり復活祭
囀やなにを塗らうか朝の麺麭
止みさうな雨を見てをり目借時

PDF= 俳誌の salon

礫像の釘

荒井千佐代

海に溶く春節の灯も街の灯も
引入線たどれば海や春満月
らんたんの明るすぎたる猫の恋
落ち込まば蘆の角さへ突き刺さる
浮寝鳥も我も頬杖死ぬるまで
まるまると姉妹の育つ桃の花
鳥雲にロザリオ繰りつつ母逝きし
みどりごの恥ぢらひ初めて花杏
礫像の釘も細れり油まじ
山吹散るユダのごとくに裏切れば

PDF= 俳誌の salon

極寒

服部早苗

鎌鼬鉄塔光り沼ひかる

大綿や母なき月日ふはふはと

九年母やうすむらさきは母の色

大寒のよく磨かれてうすき天

ひび割れの影極寒の月に出づ

うすらひや微細な餌をすくふ鳥

玻璃窓の留守をあづかるヒヤシンス

明日あるとうすく信じて種を蒔く

大八州春潮寄せてきたりけり

独活和の器は決めてありにけり

PDF= 俳誌の salon

狐塚

柴田志津子

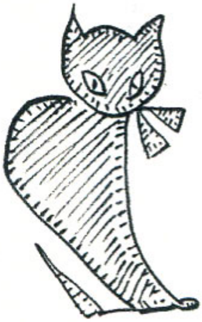
しんしんと雪降る街を冷凍車
鳥籠の軒に出さるる寒日和
追儺寺千両役者出てきたり
目を張つて駆けてくる子や合格す
目印は鳥居のあたり潮干狩
ぜんざいの餅の焦げ目や鳥帰る
若草や触れてはならぬ狐塚
物納にのこす山林十一鳴く

PDF= 俳誌の salon

最寄の駅

だいじみどり

み仏は厨子の高さにご開帳
み仏の五等身なりご開帳
石階も苔むす社みつば芹
ちよこまかといつもこばしりばかびたき
蛇穴を出て赭土をこぼしけり
拡張へ球根丸出しの水仙
背負ひたるリユックを揺すり野蒜掘る
くろもじの売れてのこりし桶と水
初雲雀最寄の駅の遠いこと



PDF= 俳誌の salon

日永

高倉恵美子

通院の服の色々春きざす
廃校の門に摘みたる土筆かな
春分や老人そろそろ動き出す
化粧せぬ日の多くなり夕朧
長生きは半分楽し花種蒔く
植木市大物ばかり売れ残る
人の名を二人で忘れ日永かな
もう飽きたと言ひて桜を待ちにけり

海路

大地真理

残雪の山追ひ返す飛行船
砂丘より白き冬波しぶきけり
神鏡は高きにありて寒明くる
寒鰤の目に玄海の海路あと
あたたかや三和土の広きお石茶屋
一枚の岩立つ岬鳥渡る
凍滝に難所いとはず会ひに行く
使ひ込む父母の円卓よもぎ餅

PDF= 俳誌の salon

空集

柴田佐知子選

宮裏の竹切る音も年用意　熊本　松田明子
砂浜を素足の走る寒稽古
引けばなほころがり離れ毛糸玉
諍ひて白鳥首を立て直す
筬音や雁木通りもここらまで
蜷の道上り下りのあるのやも
午祭ビルの谷間の正一位

麦踏むやもう何事も急がざる　千葉　原　友子
安らげる距離ありにけり浮寝鳥
冬晴や厩舎を出でて馬聳え

一階へとどく二階の軒つらら
赤き実の目の濡れてゐる雪うさぎ
はじめから鮟鱇はくたびれてをり
枯蓮になりきつてゐる鷺の脚
さて四日2B鉛筆削らうか　八尾　田岡千章

投げ入れるすなはち空へ吉書揚
春塵に掠れてバスの時刻板
角曲がるまでの見送り冴返る
真つ当に生きて窮屈梅の花
炊き立ての御飯おかはり春の雪
鮊子や嘗て自立の四畳半
百体の地蔵の分かつ冬日向　神戸　石川叔子

沖へ曳く水尾ふとぶとと寒日和
冬ざれや鐘つき堂の階軋む
雪雫うなじにくぐる大鳥居
肩ぐるまされて担ぎぬ戎笹

PDF= 俳誌の salon